

ネイション・語り・世俗批評家

ナレーション

——エドワード・サイードをめぐって——

一 はじめに

「キップリングの政治思想を憎みつつ、その芸術を愛することのできる徹底した文化多元主義者」(Eagleton 1983)——『文化と帝国主義』出版当時の書評でテリー・イーグルトンがエドワード・サイードを評したものである。一見ラディカルな知識人像を描いているようでいて、実はこの言葉自体、文化芸術と政治とを各々別個のものとして捉える社会通念を下敷きにしてしている(キップリングの政治性と芸術性とは切り離して考えることができるからこそ、前者を憎み後者を愛することは驚くべきことであると同時に、完全に可能なことでもある)。しかしながら、このような社会通念を支えているイデオロギー——文学作品を現実世

界から切断された自律的小世界とみなすこと——に意義を唱えること、帝国主義を批判しつつ平然とその文化を享受するのではなく、自らの愛する文化が帝国主義に絡めとられたものであることに痛々しいまでに自覚的であることこそが、サイードの多岐にわたる仕事の出发点だったはずである。

実際、これまで別々のコンテクストで読まれることが多く、相矛盾するとも考えられてきたパレスチナ関連の「政治的」著作とより「文化的」な著作とを相互に関連づけながらサイード思想の全軌跡を辿ろうとする研究書が、英語圏では近年相次いで出版されている(Ashcroft & Ahluwalia 1999, Kennedy 2000, Hussein 2002)。本稿の試みも基本的にはこれらの研究と同じ路線上にある。合州国同

中井 亜佐子

時多発テロからアフガニスタン戦争、イスラエル・パレスチナ紛争の激化、そしてイラク戦争にいたる混乱と悲劇の渦中にある今日、ナショナリズムにまつわる論争が世界規模で再燃焼しつつあり、またその強力な論客の一人であるサイードの言動も注目される中、現実政治への知識人の参与の必要性を訴えるサイードの政治思想を、それを基礎づける批評理念とともに再検討していくというのが私の論考の趣旨である。具体的にはまず、サイードの世俗批評的戦略が(文学)テクストと現実世界の位置関係をどのように想定しているのかという点を考察するところから始め、そこから生じる批評家という行為媒体の位置づけという問題、また第三世界におけるナショナリズム——しばしばナショナルな物語の再構築と読みかえられる——に対する知識人の役割とその立ち位置をめぐるサイードの議論を吟味し、そこにみられる論理矛盾の背後に何が問題とされているのかを探ってみたい。

二 世界とテクスト

七〇年代末から八〇年代にかけてサイードが打ち出したきた批評的姿勢は「世俗批評」という用語に集約される。

世俗批評とは、新批評以降の高度に「洗練」された英米の文学制度の閉鎖性、政治的無関心、保守性を批判し、既存の言説の外側に對抗的な批評意識の視座を見出そうという試みである。同時期にサイードは『オリエンタリズム』、『パレスチナ問題』、『イスラム報道』という「政治的」三部作を発表し、この批評意識の射程がいわゆる「文学」の境界をはるかに越えるものであることも明らかにしている。『世界・テクスト・批評家』の序文となっているエッセイ「世俗批評」の冒頭で語られる挿話は、文学に対するサイードの問題意識のあり方を端的に示しているといえるだろう。ベトナム戦争中、米国防省の高級官僚の机の上に(北爆の総責任者には全く似つかわしくないことに)ロレンス・ダレルの『アレクサンドリア四重奏』が置かれていたことを友人から伝え聞いた、というだけの話であるが、サイードはこの些細な逸話から現実世界と文学の錯綜した関係を読みとろうとする。すなわち、このように場違いな場所に出現する文学がしばしば現実をカモフラージュするということ、同時に文学を鑑賞する者と政治に関与する者は一致しないという一般に流布している考え方(「彼はあなたが思っているような殺人者ではない」という友人の言

葉が暗黙の前提としているような考え方)が、文学を世俗的な世界から切り離されたものとして想定しているということである (Said 1983: 3)。しかし、文学を自律的小世界とみなすことは、裏返せば、文学作品を読みながら現実世界では人殺しもできるということにもなる。国防省の高官は、文学作品を読むという行為によって殺人者であるという現実を隠蔽することもできるし、作品を読むことは現実世界とは何の関係もないとうそぶいて空爆の開始を指示することもできる。

「文学趣味を持つ国防省官僚」が説得力あるパラドックスとして認知された時代、英米の学界では構造主義、ポスト構造主義が独自の発展を遂げ、再びテキスト至上主義——テキスト性をそのテキストが生産されたコンテキスト、「歴史的事実」から孤立したものとみなすこと——に回収されつつあった。これに対しサイドは自らの批評の立脚点を次のように定義する。

テキストは世界の中にあり、ある程度までではできごとであり、テキストがそれを否認するように思われるときですら、社会や人間生活の一部であり、いうまでも

なくテキストが位置づけられ解釈されている歴史的瞬間の一部でもある。(Said 1983: 4)

注意しておきたいのは、このような考え方においてサイドは、言語構築主義、テキスト至上主義の脱政治性を批判しつつも、テキストの外部が独自に存在することを自明のこととする歴史実証主義に立ち返っているわけではないという点である。歴史実証主義的文学研究者の立場からすれば世界は常にテキストの指示対象として存在するが、サイドにあってテキストは、その完全な外部としての世界を指示するのではなく、両者はあくまで「養子縁組」(adoption)のごとく緩やかな連関のもとにある。テキストと世界は複雑に絡まりあい、最終的にはどちらが優位にあるともいえない関わり方をしている。このような「世界の一部としてのテキスト」という命題は、文学テキストを現実世界のコンテキストのうちにおいて読むという「対位的読解」(contrapuntal reading)と呼ばれるサイド自身の批評戦略の前提条件でもある。『マンズフィールド・パーク』というテキストはアンティグアという固有名詞を介して英国植民地支配の現実と近接関係にあるが、『マン

スフィールド・パーク』のアンティグアが現実の植民地支配を直接の指示対象としているわけではない。この小説においてアンティグアは余りに瑣末なできごとであるとか、ジェイン・オースティンは植民地支配について書いていっているわけではないといったサイド批判は、概ねサイドの歴史主義を誤解するところから生じている。

しかしながら、ある種の新歴史主義あるいは文化唯物論的立場と比較したとき、サイドの立場はかなりテクスト主義的であるとも思われる。オリエンタリスト言説という概念を持ち出すときサイドがミシェル・フーコーの言説概念を援用したことはよく知られるが、フーコーが言説分析において語りが何を表象するかということよりも各々の語りを成立させる諸制度のあり方に関心を持っていたのに対して、サイドのオリエンタリスト言説は、ある一つの表象を執拗に反復し、その反復によって現実そのものを創造するとされるテクストの膨大な集積とみなされている。「獐猛なライオン」の表象が反復されることによってライオンが獐猛になりますます獐猛さを増していくように、オリエンタリストのテクストによって構築された概念であり「真のオリエンタ」は存在しない(Said

1978: 93-94)。しかしながら、オリエンタリスト的表象がオリエンタを「非人間化」していることの前提として、誤表象を認定するための基準となるべき「真のオリエンタ」はどこかに求められなくてはならないが、慧眼の批評家といえどもオリエンタリズムの「姿勢と言及の構造」(the structure of attitude and reference)の内部に留まりつつ、オリエンタリズムの誤表象を見抜くことは論理的に不可能である。批評家は、テクストと同様世界内にありながら、世界を超越した倫理基準を保持しなくてはならない——サイドの議論にみられるこのような論理矛盾は、八〇年代半ばよりホミ・バーバ、ロバート・ヤングらポストコロニアル批評家の側からも批判されているが(Bhabha 1983; Young 1990)、現時点では、テクスト主義の論理の破綻する彼岸にサイドが何を問題としていのかを考える方が、より生産的な議論を行うことができるだろう。サイドの論理的困難さの根幹にあるのは、「世界・テクスト・批評家」というリストの第三項の位置づけ、すなわち世界とテクストを仲介する役割を担う批評家/知識人の立ち位置をどこに設定するかという問題なのである。新旧歴史主義双方において明確な位置づけがなされない(ガヤト

リ・スピヴァクの表現を借りれば)「透明な知識人」を顕在化することが、サイドの世俗批評的戦略の最も重要な部分であるとすらいえる。⁽¹⁾

三 ナショナリズムと知識人

ベネディクト・アンダーソン以降のいわゆるポストモダンなナショナリズム理論はしばしばネイション (Nation) の問題を語り (Narration) の問題へ読みかえるという戦略を用いることになるが、サイドの思想はそのような理論と相互に影響を与え合ってきたと考えられる。『文化と帝国主義』の序論でサイドは、「ネイションは語り」であり「語る権力、他の物語が出現し形成されるを防ぐ権力が文化と帝国主義にとっては非常に重要であり、また主としてその二者を結びつけるものである」(Said 1993: 233)と述べる。同時に植民地解放とは、あるエッセイの題名にもあるように、帝国主義の物語に対抗すべき民族の物語の「語りの許可」を得ることとしばしば同義である。例えば『最後の空が果つるとき』(邦題『パレスチナとは何か』)は、そのような民族の物語を語りなおす試みの一つとして企画されたものである。ジャン・モアの撮影した

パレスチナ人の写真と、その写真にサイドが付加したテクストという構成からなるこの本の製作動機が「パレスチナ人についていまだ語られていないことを語る」(Said 1993a: 4)ためであったことが序文で説明されている。モアの写真が一九八三年にジュネーブで開かれた国連会議中に展示された際には一切の文章を付加することが禁止されたために、改めて写真集を出版するにあたってサイドが「ものいわぬ被写体」の代弁者たることを自ら買って出たのである。

第三世界ナショナリズムを帝国主義の対抗言説とみなすとして、「パレスチナ解放」という民族の物語に対して、世俗的知識人としてのサイドはどのような場から発言をするのか。知識人はどの程度までそのような物語の語り手であり作者でありうるのか。サイドの議論における、第三世界ナショナリズムに対峙する知識人の立ち位置の危うさは、ナショナリズムという現象に対してサイドが両面性を見出しているからでもある。エッセイ「世俗的批評」の中で既にサイドは、知識人に対してナショナルな物語のスポークスパーソンであるだけでなく国民国家とそのナショナルな文化を超越する役割を期待している(Said

1983:114)。サイードの政治思想を評価するにあたっては、この反ナシヨナリスト、無国籍な亡命者としての側面が強調されることが多い。⁽²⁾「亡命状態」は、特定のネイションの利害にとらわれることなく公正で自由な立場から発言するサイード型知識人の立ち位置の比喩として肯定的に用いられる。『文化と帝国主義』のある箇所を読めば、確かにサイードはフランツ・ファノン、C・L・R・ジェイムズ、サルマン・ラシュディらいわゆる亡命知識人に最も共感し同一化を図っているようでもある。理論的にも、初期のバーバが『黒い肌、白い仮面』の英訳版への序文で展開した被植民者主体の権威転覆的な雑種性という発想は、サイードを発展的に継承したものと考えられている。

一方、九〇年代後半以降、ある意味ではよりラディカルなポストコロナリアル批評の文脈では、八〇年代のサイードの第三世界ナシヨナリズムへのコミットメントを積極的に再評価する動きがある。⁽³⁾そのうちの一人、第三世界ナシヨナリズムを戦略的に擁護する立場をとるニール・ラザラスは、知識人の行為媒体性 (agency) に徹底的に自意識的であるスピヴァクが、最終的に民族解放の物語への知識人の介入を否定することにつながる点を批判するとともに、

サイードの立場をむしろ率先してパレスチナの代弁者の役割を担うものとして高く評価する (Lazarus, 1994, 1997)。実際サイードは「ナシヨナリズム、人権、解釈」という論考の中で、欧米、イスラエルにおけるナシヨナリズムの抑圧性と帝国主義化を糾弾する一方で、ヨーロッパをナシヨナリズムの発祥の地とし第三世界のナシヨナリズムをそのレプリカとみなすようなナシヨナリズムのヨーロッパ独占思想、あるいは構築主義的国民論を第三世界の問題に安易に適用することをも批判の対象としている (Saïd, 2000: 41-36)。サミュエル・ハンティントンの『文明の衝突』における硬直した文明アイデンティティ観を批判する際には、サイードはエリック・ホブスボウムらの「伝統の発明」論を積極的に利用するが (Gagnon, 2006)、ホブスボウムが第三世界ナシヨナリズムを大衆から断絶した少数の「ヨーロッパ化された」知識人による「国家」の発明であるとはのめかす時にはホブスボウム批判にまわる (Htay, 2003; Hobbs, 1990: 131-162)。また、第三世界ナシヨナリズムの独裁化、いわゆる「部族抗争化」に対する欧米先進諸国側からの道徳的批判についても、イスラエル側の軍事行為とパレスチナの「テロリズム」を論じる際の合州国におけ

る明らかな二重基準を例にとり、批判の道徳的基準の普遍性はいまだ確立していないことが指摘されている（もともとサイードは普遍性そのものの価値は否定していないようであり、例えばアーネスト・ゲルナーの近代主義的ナショナリズム論についてはその普遍性への志向をむしろ評価している）。さらには、『文化と帝国主義』第三章で展開されるナショナリズム論がゲルナーやアンダーソンといった英語圏の理論家の議論ではなく、ファノンの第三世界ナショナリズム論に依拠している点も注目に値する。サイードは無条件にナショナリズムを否定するのではなく、植民地主義の抵抗としてのナショナリズムには一定の共感を示している。ファノン同様、独立達成後の社会意識をとまなわない硬直したナショナリズム（ファノンによれば「ブルジョワ・ナショナリズム」）は批判されなくてはならないとしても、植民地のマニ教的世界にあっては、まず権威を転覆するための暴力 \parallel ナショナリズムは避けがたいものとなる（Said 1993: 323）。

『文化と帝国主義』で展開されるナショナリズム論においても、知識人には対抗物語（counter-narrative）の語り手としての役割が期待されている。例えばファノンの仕

事については、最終的には次のように評される。

『地に呪われた者』の最後の数頁を読んでいて感じるのは、強力な脱構築力を持つ対抗物語をもって帝国主義と正統ナショナリズムの双方との闘争に身をゆだねた後、ファノンはその対抗物語の複雑さと反アイデンティティ主義を明確にできなかったということである。しかしファノンの散文の曖昧さと難解さの中には、解放がプロセスであり新興独立国家が自動的に手にするゴールではないということを、詩的あるいは幻想的に示唆するものが十分にある。（331）

対抗物語が実際どのようなものであるべきかは別として、そもそも「語り手」の存在に目を向けること自体において、サイードの議論はポストモダン・ナショナリズム論と一線を画している（例えばバーバが「ネイションと語り」で発表させている間隙性（the in-between）という概念は、国民的主体を脱構築／再構築する磁場のようなものとして構想され、なんらかの主体性を備える語り手の立ち上がる可能性を理論的に排除する）。初期のパレスチナ関係著作

においては、対抗物語はパレスチナ解放の物語であり、サイド自らが、特定のネイションの内部にありつつネイションを代表／代弁する行為体、グラムシ的な「有機的知識人」の役割を請け負っている。その典型的な一例である『パレスチナ問題』は、「パレスチナ人は存在しなかった」というシオニズムの主張に対抗して「私たち(パレスチナ人)はいつでも存在していた」という主張を掲げると同時に、「パレスチナ人」という国民的主体の立ち上げを宣言し、あるいはそれ自体が一種の独立宣言としてネイション構成を遂行するのである。『パレスチナ問題』においてサイドは、文字通りパレスチナ人の代表者、代弁者として立ち現われる。「私の仕事はパレスチナの物語を提示すること」(Saïd 1979: 118)なのである。語る主体そのものが語り——〈追放〉と〈帰国〉という集団夢——によって(再)形成されつつあるともいえるが、ここでのサイドはそのような欠如を前提とした主体形成プロセスそのものにまつわるアンビヴァレンスには意識的ではない。このような「私」Ⅱ「私たち」を前提とした語りは、しばしば一人称複数形の語りの戦略となる(パレスチナ人を指す一人称複数形の語りは、八〇年代後半の第一次インティファア

ダ期の文章や、『最後の空が果つるとき』の第三章などに多用されている)⁽⁴⁾。

無論、一昨年九月十一日以降の数々の発言に明らかのように、サイドは唯一の超大国アメリカ合州国におけるナショナリズムの台頭に対しては(イスラエルのシオニズム、拡張帝国主義に対するのと同じように)批判、警告を発し続けてきた。テロ以前に書かれたサミュエル・ハンティントン批判の中でサイドは、文明のマウスピースを自認する公的代表者のみをもって「私たち」あるいは「彼／女たち」の文明を語り、一つの文明を完全に均質なものと捉え、「私たち」対「彼／女たち」という二項対立を構築することの危険性を指摘している(Saïd 2000: 569-90)。ここでのサイドは、「私たち」「彼／女たち」の集団に所属しない個人による抵抗を強調する。同時にパレスチナ関連の文章においても、特に九三年のオスロ協定をめぐりヤセル・アラファットと決別して以降自伝的色彩を強めてきた著作において、パレスチナ国家を回復する物語の主体／主語には回収されない「私」にしばしば言及する。それは、「私たち」を代弁するというよりはむしろ「私たち」によってたえまなく浸入されているが決して同一化することもない

「私」であり、なんらかの共同体に属しつつも外部性を保持する亡命者としての「私」なのである。⁽⁵⁾

サイドにおける「私」と「私たち」の語りのあいだの緊張関係を解消し、その「故郷喪失者」でありつつ「世俗的」であるという知識人像の矛盾を整合性あるものと解釈しようとする試みの一つが、よく知られるアブドゥル・ジャンモハメドの「鏡面型境界知識人」(specular border intellectual) という概念である。鏡面型境界知識人とは複数の文化の間であってどれか一つの文化に全面的に加担したり、あるいは複数の文化を融合させて新しい文化を創造したりするのではなく、あくまで文化の狭間であってそれぞれの文化を相互に照らし合いつつ緻密に分析するようなタイプの知識人のことで、文化統合型知識人、例えばラシュディなどと対比されて論じられている。鏡面型境界知識人の言説空間を理論的に規定する上でジャンモハメドはフーコーのヘテロトピアという概念を援用するが、強調されるのはむしろ、現実の場所として存在しながら反∥場所として機能するヘテロトピア(ユートピアとは異なり現実の場所として存在するが、他の実在する場所がこのヘテロトピアを通してのみ初めて現実として認識される鏡として

の機能を果たす場所であり、フーコーが例として挙げるのは牢獄、精神病院、売春宿、植民地など)があくまで場所であるのに対して、サイドの場合は知識人が国境と同一視され、国境という場所そのものが人格化、主体化されているという点である。「間接的、非間接的に彼・彼女自身を社会的に構築されたヘテロトピアの国境と読みかえることによってのみ、知識人は自らの鏡面的潜在力を分節化できる」(JanMohamed, 1992: 117)とジャンモハメドは論じる。

このように国境が主体となることによって再び問題となるのは、そのような主体の語る物語は、民族解放の(リオタールの)「大きな物語」とどのような関係にあるかということである。「私たち」から「私」を国境線へと分離抽出することは、「私たち」が「彼／女ら」を表象∥代表するというオリエンタリズムの問題から、「私たち」を「私」が表象∥代表するというポストコロナリアル批評の問題へと視点を移行することでもある。ポストコロナリアル知識人は第三世界の代弁者となりうるか——裏返せば、サルタンは語ることができるか——という問いにサイドはスピヴァクほど自覚的ではないと考えられてきた。しかし、

サイドが知識人を決して「透明な存在」とは考えていないこと、にもかかわらずオリエンタリスト言説に関してサイドが問題としたのが(あるいは理論的に問題としたのが)抵抗ではなくオリエンタリストの圧倒的な権力の方であったということ、このサイド・パドックスに潜む問題意識こそが、支配的言説によってサバルタンの声が抹殺されてしまうプロセスに注目するスピヴァクによって顕在化され、再理論化されるとみられることでもできるだろう。

四 「私」はどこに在るのか

スピヴァクの「サバルタンは語ることができるか」は、次のような警句で締めくくられる。

サバルタンは語ることができない。世界共通洗濯リストにもっともらしい項目として「女性」を加えてみたところで、なんの利点もない。表象 \parallel 代表の作用はいまだ衰えてはいない。女性知識人には知識人として限定された(circumscribed)任務が課せられており、それを大げさな身ぶり⁽⁶⁾で放棄すべきではない。

(Spivak 1988 : 308)

「サバルタンは語ることができない」という冒頭の一文の華々しさのみに目が奪われがちだが、この文章は同時に表象 \parallel 代表の作用、知識人の任務を(それがいかに限定的なものであったとしても)肯定するものでもある。語る主体としての自己を可視化しその責任を請け負いつつ語り続けるという知識人の営みは、このような限定辞の多用からなる複雑な文体によってのみ分節化されうる。これまでみてきたように、世界とテキスト、歴史と表象、あるいはネイションとその物語をそれぞれ結び合わせる行為媒体としての知識人の存在を基礎づけることがサイドにとっては重要な課題であったわけだが、『知識人の表象』で高らかに宣言される「真実を表象 \parallel 代表する」という知識人の任務遂行にサイドの「私」的文章が挫折する瞬間にこそ、サイドは最も誠実に、知識人の「限定された任務」について語っているのである。このような観点から、おそらくサイドが最もスピヴァクの問題意識に近づいたと考えられるテキスト、『最後の空が果つるとき』をこの論考の最後に検討しておきたい。

一九八六年に初版が刊行された『最後の空が果つるとき』は、サイドの世俗批評的試みの実践例であると同時に

に、ナショナル・アイデンティティの問題を「主体の断片化」という問題意識を通じて問いなおし、国民的主体の(脱)構築というテーマそのものを物語化するという意味において、彼の著作の中でも最もポストモダンな試みといえる(バーバがしばしば引用するテキストでもある⁽¹⁷⁾)。国民的主体を脱/再構築するサイドの戦略的問いかけは次の一節に要約される——「私たちはいつ〈民族〉になったのか、いつ〈民族〉であることをやめたのか、それとも〈民族〉になる過程にあるのか」(Said 1999a: 34)。先ほど指摘したように、本の序文でサイドは自らの知識人としての役割を「ものいわぬ被写体」の代弁者と位置づけているのだが、実際のテキストはパレスチナ人の民族離散/結集の大きな物語への夢を放棄したかのように、イメージの間を蛇行する断片的な文章となっている。また、この本におけるサイドの人称代名詞の用法、特にパレスチナ人を指す代名詞の揺れから、「私」の語る物語の正当性に対する不安が表出されているとみることが出来る。しかしその一方で、断片化された物語が再び戦略的に本質化、「パレスチナ化」されることにも注意を払う必要がある。

私たちの歴史は禁じられているので、物語は稀である。起源、故郷、ネイションの物語は地下に潜伏する。地上に現れるときにもばらばらで、気まぐれで、ひどく蛇行し、常に暗号化され、とっぴな形式をとる——擬似叙事詩、風刺、冷笑的なたとえ話、不条理な儀礼——それゆえ外部の者にはほとんど意味をなさない。このようにパレスチナ人の生は離散し不連続であり、特徴的なのは、中断され閉じ込められた空間の人工的で無理強いされた配置、かき乱された時間の転位と非共時的リズムである。(20)

つまり、「ばらばらで、気まぐれで、ひどく蛇行し、常に暗号化され、とっぴな形式をとる」サイドの私的な文体そのものが、「離散し不連続な」パレスチナ人の生の隠喩となるのである。

このような「私」と「私たち」のあいだの綱引きは全章を通じてみられるが、特に興味深い問題を投げかけているのが、「内部」(Interiors)と題された第二章である。この章ではイスラエル在住のパレスチナ人——「私たち」亡命パレスチナ人とは異なり「イスラエルの刻印を押され

た」人々——とパレスチナ人の女性を取り上げられるが、これらの人々は全て三人称で言及される。この章には、世俗知識人自らが自己の物語の正当性を突き崩す問いを投げかける箇所がある。例えば一九三二年、英国統治下のパレスチナでサイドの母親が、結婚登記所でイギリス人の役人にパスポートを破られたという挿話がある。結婚後は夫のパスポートで同行するように言われ、それに対して彼女が抗議をすると、「こうすればもう一人ユダヤ人を移住させることができる」と説明される。この話を恥じて語りたがらない母親に代わってサイドがここに再現しているわけだが、物語の結論部分で彼は次のように自問する。

問題は女性の苦しみをどう見るかということになる。

彼女が従属的地位に甘んじたり犠牲を強いられたりするの、主として彼女がアラブ人ムスリム社会の女性だからか、それともパレスチナ人だからか。この問いにかに答えようともし、女性の人權の否定もパレスチナ人の追放も、同程度の細密さでもって吟味することが緊急に必要とされる。なぜならそのどちらにも私たちは現在の状況を構成する要因だからだ。(78)

被抑圧者の多様性を認知するこの一瞬の身ぶりにもかかわらず、章全体においては結局、問題はパレスチナ人の問題に一元化されている。より正確にいえば、女性を観察する視線がそのまま、「植民地主義、シオニズムの最も内部における犠牲者」を見つめる視線にすりかわっていくのである。「内部」(internal)とは「イスラエル在住のパレスチナ人」のことを指すが、サイドはこの語を援用して「容易にのぞきこむことのできない、隠されたなものか」というような意味に用い、その最も奥にあるのが「パレスチナ女性」だと規定する。ひとたび顕在化した他者はこうして再び「私(たち)」の物語に吸収される。

にもかかわらず、「私(たち)」の語りえない「彼女」の物語のもたらす不安は、カメラ越しに見つめ返す「ものいわぬ被写体」の視線の効果とともに、このテキストから完全に消えることはない。この章の最後に取り上げられるのはカメラに向かって微笑む一枚の女性の写真である。初めてこの写真を見たときサイドは、一人のイスラエル在住パレスチナ人の写真であると思われないが、後に自分の妹に指摘されて知人のファッラージュ夫人の写真であることに気づく。それは他者が固有名を持ちうることを確認す

る契機の一つであるが、しかしここに来て彼は、これまで接してきた多くの写真がはたして真実を語ってきたのかという問いにぶつかる。

彼女は私たちの「内部」に住み、実在の歴史をもつ在の人物——パレスチナ人——だ。しかし私は写真が彼女たちのありのままを語ることができるのか、現に語っているのか、わからない。何かが失われている。だが表象のみが、私たちの手にすることのできる全てなのだ。(84)

「写真は語ることができない」と意識して初めて、ファッラージュ夫人の微笑みは、「内部」にある者の、被写体として見つめられるだけでなく写真を見る者を見返す抵抗のまなざしとなって、「私」に還ってくる⁽⁸⁾。しかし皮肉なことに、語られることのない物語の亡霊がつきまとっているというこの感覚こそが、サイドのパレスチナ関連著作の中でも特にこの『最後の空が果つるとき』を、完全に「私」の物語でも「私たち」の物語でもないものとして、より多くの読者に開かれたものになっている。それが一方で

はバーバの脱歴史的、脱主体的なポストコロニアル理論というプロジェクトへつながっていくとしても、他方ではスピヴァクが掲げた「語り手」としての知識人の主体そのものへ向けられた自己破壊的な問いを内含する、サイド思想の両面性と危うさを凝縮したテキストとなっているのである。

(1) 「サブアルタンは語ることができるか」でスピヴァクは、フーコーとドゥルーズが理論を行動そのものであると規定することによって、表象≠代表 (representation) の問題を(この語の二つの意味の差異を隠蔽することによって二つの意味の共犯関係をも隠蔽しつつ)捨象してしまう点を批判する。フーコーとドゥルーズにおける知識人は、その理論に導入される二つの構成的主体、すなわち権力、欲望という大文字で始まる主体 (Subject) と非抑圧者の主体 (subject) のどちらでもない透明な存在として、その二つの主体について報告、分析していることになる (Spivak 1988: 273)。スピヴァクは、自らを透明な存在として表象する知識人の主体を、実際には「社会化された資本の法的主体であり、労働者でも経営者でもなく、〈強い〉パスポートを所持しており、〈強い〉あるいは〈国際価値の高

い)通貨を使用し、なんら疑いもなく正当な手続きにアクセスできると想定される」(273) 主体と説明している。

- (2) 日本語によるサイド論の多くもこの見解をとっている。大橋洋一は、サイドの批評空間を「[パレスチナという] 未来に実現されるべきことを要求する現在のなかにある異界なのであり、そこに立脚し所属することで、どこにも所属しない追放の立場からの批判的営為が可能になる場」と位置づけている(大橋 1996:142-143)。姜尚中は、『オリエンタリズムの彼方へ』等の著作において、サイドの「亡命状態」を自らの批評的実践として実現している(姜 1996)。

- (3) 日本でも近年同様な観点からサイドを論じる向きがある。例えば轡田竜蔵は、「確立したネイション」の文化ナショナリズム批判から第三世界ナショナリズムへという轡田自身の文脈の中で、『文化と帝国主義』を第三世界ナショナリズムを擁護するものと捉えている。同じ論文の中で轡田は竹内好のアジア主義の再評価を行っている(轡田 2001)。

- (4) サイドが語る主体/主語を指す代名詞に非常に自覚的であることはしばしば指摘される。(Kennedy 79-76)。アメリカ合州国人を指す「私たち」も非常に意識的に、しばしば引用符をともなって用いられる。

- (5) 一九九九年に出版された自伝(邦題『遠い場所の記憶』、原題は *Out of Place*) の中には、サイドの「私」語りの原体験ともいえそうな挿話が語られている。カイロでの少年時代、当時通っていたイギリス人学校からの帰宅途中学校の敷地内を歩いていたサイドは、クラスメートの父親でもあるイギリス人に呼びとめられ、「アラブ人はここには入ってはいけない。おまえはアラブ人だ。」と言われる(Said 1999b:44)。「私」はすでにその中にいるにもかかわらず存在を禁止されている場違いな存在(*being out of place*)として認定される、すなわち「私」が植民地支配者によって被支配者と命名される瞬間であり、また「私」の居場所と思われたところに「私たち」が浸入していくことに対する「私」のとまどいの瞬間でもある。

- (6) 『ポストコロニアル理性批判』においてスピヴァックはこの部分を書きかえ、「サバルタンは語ることはできない」と書いたのは不適切であったと述べている(Sпивак 1999:308)。おそらくは、さまざまなコンテクストをつき合わせながら抑圧された女性の主体構築のドラマを可能な限り炙り出すという彼女の仕事で、この一文によって「サバルタンの声の否定」と解釈されてしまったことに対する反省なのだろう。

- (7) ハーバは『最後の空が果つるとき』における「断片化

された「バレスチナ」を、ナショナリズムの言説の自己分節化の過程に生じる脱構築的空間の例として論じる (Bhabha 1991)。

(8) 『最後の空が果つるとき』の写真の中でも最もこの「抵抗のまなざし」を象徴するのは、片方のレンズの割れた眼鏡をかけて微笑む男性の写真 (Said 1999: 128) だろう。八六年版の表紙にも使われたこの写真についてサイードは、*「そもそもなぜこのような状態で撮影されることに同意したのかという点にまで思いをめぐらすのが、結局この男性の意図を読みとることは不可能である。」*割れたレンズ」は、バレスチナ人の解釈不能性を表すとともに、*「写真を見る者を少なからず不安に陥れる。」*

引用文献

Ashcroft, Bill, Ahluwalia, Pal, *Edward Said: The Paradox of Identity*. London: Routledge, 1999.

Bhabha, Homi K. "Difference, Discrimination, and the Discourse of Colonialism." Barker, Francis et al. eds. *The Politics of Theory*. Colchester: U of Essex P, 1983.

———. ed. *Nation and Narration*. London: Routledge, 1990.

———. "A Question of Survival: Nations and Psychic States." Donald, James ed. *Psychoanalysis and Cultural Theory: Thresholds*. New York: St. Martin's, 1991, 89-103.

Eagleton, Terry. "Culture and Imperialism Review." *Guardian* (9 February 1993), 10.

Foucault, Michel. "Of Other Spaces." *Diacritics*, 16: 1 (Spring 1986), 22-27.

姜尚中『オリエンタリズムの彼方へ』岩波書店、一九九六年。

Kennedy, Valerie. *Edward Said: A Critical Introduction*. Cambridge: Polity Press, 2000.

樽田竜蔵「〈平凡なナショナリズム〉と〈第三世界ナショナリズム〉の間」『現代思想』二六卷一六号(二〇〇一年)二四八—六二頁。

Hobsbawm, Eric J. *Nations and Nationalism since 1780: Programme, Myth, Reality*. Cambridge: Cambridge UP, 1990.

Hussein, Abdirahman A. *Edward Said: Criticism and Society*. London: Verso, 2002.

JanMohamed, Abdul R. "Worldliness-without-World, Homelessness-as-Home: Toward a Definition of the Specular Border Intellectual." Sprinkler, Michael ed.

- Eduard Said: A Critical Reader*. Oxford: Blackwell, 1992. 96-120.
- Lazarus, Neil. "National Consciousness and the Specificity of (Post)colonial Intellectualism." Barker, Francis et al. eds. *Colonial Discourse/Postcolonial Theory*. Manchester: Manchester UP, 1994. 197-220. (日本語訳: 藤原隆雄 訳 *ラザラスのラザラス、民族主義と文化実践のポストコロニアル世界* [Cambridge: Cambridge UP, 1999] 載: 藤原隆雄 訳 15-90)
- . "Transnationalism and the Alleged Death of the Nation State." Pearson, Keith Ansell et al. eds. *Cultural Readings of Imperialism: Eduard Said and the Gravity of History*. New York: St. Martin's, 1997. 28-48.
- 大橋 洋一 「トランスナショナル・ナーション」『現代国際』1111(2004年) 111-114頁。
- Said, Edward W. *Orientalism: Western Conceptions of the Orient*. London: Routledge and Kegan Paul, 1978.
- . *The Question of Palestine*. 1979. New York: Vintage, 1992.
- . *The World, The Text and the Critic*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1983.
- . *After the Last Sky: Palestinian Lives*. 1986. New York: Columbia UP, 1999a.
- . *Culture and Imperialism*. London: Chatto and Windus, 1993.
- . *Representations of the Intellectual: The 1993 Reith Lectures*. 1994. New York: Vintage, 1996.
- . *The Politics of Dispossession: The Struggle for Palestinian Self-Determination, 1969-1994*. New York: Vintage, 1995.
- . *Out of Place: A Memoir*. New York: Alfred A. Knopf, 1999b.
- . *Reflections on Exile*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 2000.
- Spiwak, Gayatri Chakravorty. "Can the Subaltern Speak?" Nelson, Cary, & Grossberg, Lawrence eds. *Marginalism and the Interpretation of Culture*. Urbana: U of Illinois P, 1988. 271-313.
- . *A Critique of Postcolonial Reason: Toward a History of the Vanishing Present*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1999.
- Young, Robert J.C. *White Mythologies: Writing History and the West*. London: Routledge, 1990.

〔付記〕

本稿は日本文学学会第七四回全国大会シンポジウム「ナ
ショナルリズムと文学」(二〇〇二年五月二十五日)におけ
る口頭発表に加筆補正を行ったものである。当日のパネリ
スト大野雅子氏、田尻芳樹氏、三宅芳夫氏に貴重なコメン
トをいただいたことに感謝したい。

(一橋大学大学院言語社会研究科助教授)